



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2018.12) 平成30年度:19-20.

精神看護学実習が看護学生の精神障害を有する者のイメージに与える影
響

伊藤 美郷, 瀧野 早希

精神看護学実習が看護学生への精神障害を有する者のイメージに与える影響

伊藤美郷 瀧野早希

(指導：長谷川博亮)

緒言

看護学生は精神看護学実習において様々な精神障害を有する者（以下、対象とする）と対人関係を深め、看護ケアを行う必要がある。実習前に看護学生が抱く対象に対するイメージとしては、恐怖心や緊張感、不安などのマイナスイメージを持つことが多い¹⁾との報告がある。看護学生のマイナスイメージは看護ケアに悪影響を与えてしまう可能性がある。一方で、先行研究により看護学生の実習前後の対象に対するイメージは肯定的に変化していることは明らかにされている¹⁾。看護学生と対象との継続的な関わりは実習前後で看護学生が対象に対して抱くイメージを変化させる。本研究では、対象との出会いを通して対象に関するイメージだけではなく、人権問題や人間理解などの看護的な視点の広がりにつながるのではないかとすることに焦点を当てた。

以上のことから本研究は、精神看護学実習を通してイメージが変化するきっかけとなる出来事や学生自身の認識の変化を分析し、それらが看護ケアに与える影響を明らかにする。

方法

研究対象：A 大学医学部看護学科の学生 3 年生 59 名、4 年生 61 名。

調査方法：無記名自記式質問紙調査。調査期間は 10 月中旬とし、研究者 2 名により研究対象者に研究の目的、倫理的配慮を紙面および口頭で説明した後、実施した。

調査内容：対象者の基本属性と先行研究を参考に独自に作成した看護ケアに関するものとイメージの変化に関する自由記述、林ら（1978）の特性形容詞対 20 項目（「やや」、「かなり」、「非常に」3 段階を設定し、7 件法で評価する）、社会的偏見に関する質問項目として岡本ら（2002）の 4 項目を用いた。社会的偏見を問う質問項目は①精神障害を抱えた者に対して世間は偏見があるか②医療者は偏見があるか③社会に出た方がよいか④社会の受け入れ体制は整っているかの 4 つとした。

データ分析方法：結果は、平均±標準偏差で示し、群間の比較は Mann-Whitney U test で行い、有意

水準は $p < 0.05$ とした。次に、社会的偏見に関する 4 つの質問項目の回答を点数化し、実習終了群の 4 年生を偏見あり群とない群に区別し、看護ケアに関する質問の回答との関連の有無を分析した。分析には IBM 社の SPSS(ver.22.0)を使用した。

倫理的配慮：アンケート用紙は無記名自記式とし、匿名性を確保した。研究の参加は自由意志であり、参加の有無に関わらず不利益を生じないことや、いつでも研究への参加を辞退できること、答えたくない質問項目については答えなくてもよいことを示した。アンケート回収箱を 1 週間設置し、本人の投函をもって最終同意とした。

結果

3 年生 59 名、4 年生 61 名に配布し 3 年生 56 名（回収率・有効回答率 94.9%）4 年生 34 名（回収率・有効回答率 55.7%）から回答が得られた。

精神障害を有する者との関わる要因を以下に示す。（表 1）将来の精神看護に関わる仕事への就職希望は 3 年生で 26.9%と実習前であるが高かった。

表 1 精神障害を有する者との関わる要因

	3 年生(実習前群)		4 年生(実習後群)	
	n	%	n	%
3 年生 n=56 4 年生 n=34				
身の回りの精神疾患を有する者の有無	有	5 9.1	7 20.6	
	無	50 90.9	27 79.4	
精神疾患を有する者と接した経験の有無	有	4 7.3	6 17.6	
	無	51 92.7	28 82.4	
将来、精神看護に関わる仕事への就職希望の有無	有	14 26.9	7 20.6	
	無	38 73.1	27 79.4	

特性形容詞のイメージ調査では、「にくらしいーかわいらしい」($p = 0.010$)、「非社交的ー社交的な」($p = 0.034$)、「堂々としたー卑屈な」($p = 0.030$)、「不親切なー親切な」($p = 0.042$) の 4 項目において 3 年生、4 年生で有意な差が認められた。

表 2 社会的偏見と看護ケア

	問1. 精神障害を抱えた者のケアとしてコミュニケーションは重要である		問2. 精神障害を抱えた者との関係づくりは重要である	
	そう思う	どちらでもない	そう思う	どちらでもない
偏見あり	13	2	14	1
偏見なし	18	1	17	1
	問3. 精神障害を抱えた者にケアを行う上で対象を理解することは重要である		問4. ケアを行う際に将来の可能性を考えることは重要である	
	そう思う	どちらでもない	そう思う	どちらでもない
偏見あり	15	0	13	1
偏見なし	19	0	16	1

社会的偏見に関する 2 群の区別方法は、中央値である 7 を境界に偏見があり群(5~6 点)、偏見がない群(7~8 点)とした。以上の 2 群で χ^2 検定を行っ

た結果、各質問項目に対して2群間での有意な差は認められなかった。

4年生のみに行った、精神障害を有する者に対するイメージの変化のきっかけとなった出来事・イメージの変化が実習全般に与えた影響についての自由記述は以下の通りである。(表3、4)

表3 自由記述回答

イメージ変化のきっかけとなった出来事	割合(%)
患者とのコミュニケーション	47.2
患者の人間理解	17.6
元々持っていた精神疾患に関するイメージとの差	23.5
患者との関係性の深まり	11.7

表4 自由記述回答

イメージの変化が実習全般に与えた影響	割合(%)
積極的にコミュニケーションをとれるようになった	29.6
疾患を意識することなく接することができるようになった	29.4
自分が気付かないうちに偏見を持っていたことに気が付いた	11.7
恐怖心や偏見を持たないように意識した	23.5
その他	5.8

考察

1. 実習前後のイメージの変化

特性形容詞によるイメージ調査では、3年生、4年生間に有意な差が認められなかった項目は、20項目中16項目であった。これは、3年生が実習前であるにも関わらず、将来の精神看護への就職希望が約30%であることにも関連していることが考えられる。「にくらいいーかわいらしい」、「非社交的ー社交的」、「堂々としたー卑屈な」、「不親切なー親切的」の4項目においては3年生、4年生で有意な差が認められ、実習を終えた4年生の方がイメージがプラスに変化した。4年生にのみ精神看護学実習前後で、精神障害を有する者に対するイメージ変化があった人に対し、イメージ変化のきっかけとなった出来事を自由記述で尋ねたところ、【患者とのコミュニケーション】【患者の人間理解】【元々持っていた精神疾患に関するイメージとの差を感じたこと】【患者との関係性の深まり】であった。特に注目すべきは、【患者とのコミュニケーション】【患者の人間理解】が挙がっていることである。実際に精神障害を抱えた者との関わりや交流を通して、精神的な疾患を抱えた患者というよりもその人自身に対する理解を深めることができ、イメージがプラスの方向に変化したと考えられる。これらは、精神障がい者に対するイメージは、精神看護学実習を体験することにより肯定的な方へ変化し、精神障がい者を一人の人間として認識できる²⁾という結果にも一致する。精神障害を有する者に対するイメージの変化には、直接的な関わりが有効であること、学生は実習を通してよりプラスのイメージ変化が積み重ねられると言える。特に、3年生と4年生間で差が認められた特性形容詞は、直接的な印象ではなく、対人関係を経なければ感じられない要素があると考えられる。

2. 社会的偏見と看護ケアに関する考えの関連性

社会的偏見がある群とない群の2群に区別し、看護ケアに関する質問項目への回答の差を比較したが、有意な差は認められなかった。これは、研究

対象者が看護学生ということもあり、ケアの重要性や患者との関わりを講義や今までの経験を通して重要視しているため、社会的な偏見があると感じている人でも精神障害を抱えている人を看護の対象として重視していることが考えられる。看護学生個人の实習への理解や実習のあり方という考えが継続的な関わりを促していると言える。また、実際に精神障害を有する者との関わりを通して、患者自身の思いやその人が置かれている社会的な立場を理解したことで、社会や医療者が精神障害を有するに対して偏見を抱いている現状を知り、それが回答に反映されていることが示唆される。

3. イメージの変化が実習全般に与える影響

表4において、【疾患を意識することなく接することができるようになった】が挙がっていることから、学生の疾患の位置づけが変化し、広い意味で対象を理解することに重きが置かれたと言える。イメージが変化することにより、看護学生自身が持つマイナスイメージに惑わされることなく患者の個別性や人間性に重点を置き、積極的にコミュニケーションをとる姿勢へと変化がもたらされる。これは、患者の将来の可能性を考慮し、健康的側面を捉えるという視点で看護ケアを実施することに繋がると考えられる。

以上の研究結果から、精神障害を有する者との実習での関わりがイメージの変化の要因となり、対象理解に繋がることがわかった。また、実習前の事前準備として精神疾患に関する知識を習得することで、対象の言動や行動は疾患によるものであることが理解でき、疾患という側面ではなく、その人のありのままの姿を受け入れることに繋がると考える。

研究の限界

本研究では、3年生と4年生の質問紙の回収率の差が大きいため、結果を一般化することに限界があると考えられる。よって、今後、他の集団でも調査を行い、対象の拡大を図る必要がある。

謝辞

本研究に協力を頂いた皆様に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 岡本隆寛, 阿部由香, 松本孚: 精神看護実習前後における看護学生の精神科に対するイメージの変化(第1報), 順天堂医療短期大学紀要, 13, 85-95, 2002.
- 小坂やす子, 文鐘聲: 精神看護学実習前後における看護学生の精神障がい者に対するイメージの変化, 太成学院大学紀要, 13, 195-201, 2011.
- 三原亜矢巳, 夢喜田恵子: 学生が困った場面を振り返ることの学習効果ー精神看護学実習におけるプロセスレコードの分析よりー, 名古屋市立大学看護学部紀要, 1, 63-70, 2001.
- 藪田歩, 山下真裕子, 伊関敏男: 精神看護学実習前の看護学生の精神障がい者に対するイメージ, 神奈川県立保健福祉大学誌, 13, 61-70, 2016.
- 林文俊: 対人認知行動の基本次元についての一考察, 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学), 25, 233-247, 1978.